

(曾於郡松山町泰野3153-1)

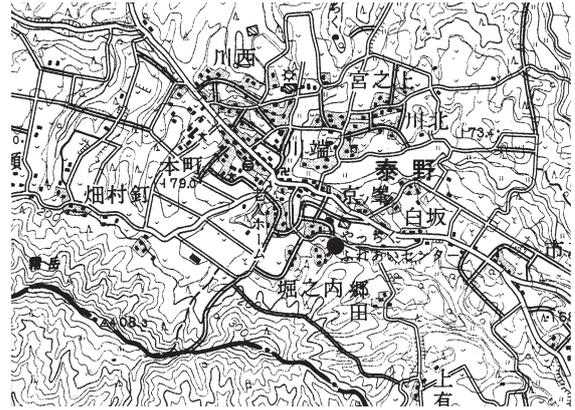
位置と環境

前谷遺跡のある松山町は、大隅半島曾於郡のほぼ中央部に位置し、東西に細長く東西12km、南北4kmである。東は志布志町、西は末吉町、南は有明町・志布志町、北は末吉町に境している。

経緯度は東経13度から13度7分で、町総面積は49.69km²であり、山岳は末吉町に境する宮田山520m、有明町に境する霧岳408mが主な丘陵で、河川は大隅町岩川から新橋を経て、町の西端を流れる斐田川上流と、尾野見排水東端と大統東端を流れる安楽川の支流が主な河川である。気温は年間平均16.5度で西部台地と東部台地とでは年間平均気温が1度から2度の差があり、西部台地は一般に霜が早く10月中旬には、初霜を見ることもある。晩霜は4月下旬で終わる。夏季における気温の変化は大差なく、最高36度位である。降雨量は平均2.190mmで中でも5月、6月の梅雨期と、8月9月の台風来襲時に集中するためシラス台地にある耕作地においては土の流失、埋没侵食の被害もある。風は12月から翌年3月にかけて北西の季節風が強く高台では冬作物の被害もある。4月から7月にかけては南東の風があり、6月下旬から10月にかけての台風襲来時における災害は耕地作物に与える影響が極めて大である。前谷遺跡は大字泰野にあり、小字前谷の一部である。後に標高408mの霧岳の裾野が広がり、前には豊富な湧水があり今でも豊富な水量が付近の水田用水として利用されている。

調査の経緯

昭和59年4月に泰野字前谷3153-1番地の畑地を平坦に整地しようとしたところ、縄文式土器等が多量に出土したため、土地所有者である金子繁蔵は直ちに町教育委員会へ連絡し、その取り扱いについて協議を行なった。町教育委員会は、県教育委員会と協議を重ねた。その結果、昭和60年度には発掘調査を国、県の補助を受けて発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て、昭和60年7月1日



第1図 前谷遺跡の位置

から8月17日までに発掘調査を実施した。

遺構と遺物

前谷遺跡は縄文時代、弥生時代、歴史時代の複合遺跡であり、中心となるのは縄文時代である。

歴史時代の遺構は、掘立柱建物跡4棟が検出された。略東西に主軸をとるもの2棟、略南北に主軸をとるもの1棟、主軸不明1棟である。遺物は出土していないが、周辺に土師器の小破片を確認した。

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡1軒が検出され、遺物は出土していないが、周辺から弥生時代中期の遺物数点を採集した。

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡5軒が検出された。方形の住居跡3軒、円形の住居跡2軒、円形ピット1基、集石1基、焼土1か所である。遺物は縄文時代前期末の春日式土器、石鏃、磨石、叩き石、石斧、石匙等が出土した。

土器は大部分が春日式土器で、そのほかに轟式系土器、曾畑式系統土器や瀬戸内地方とのつながりを



写真1 住居跡検出状況

示す縄文、撚糸文を施す土器が出土している。

特徴

縄文時代前期の時期の住居跡と春日式土器がまともって出土した例は県内でもめずらしく、貴重な資料となった。また、そのほか多数の石器とドングリなどの炭化物も出土している。これらの資料は当時の生活様式や状況を知る上で非常に参考になる。さらに瀬戸内地方の土器が出土し、石鏃の黒曜石も大分産のものがあ、当時の交流範囲の広さが伺える。

資料の所在

出土遺物は、松山町歴史民俗資料館に保管、展示されている。

参考文献

松山町教育委員会1986「前谷遺跡」『松山町埋蔵文化財発掘調査報告書』1

(上田義明)



写真2 遺物出土状況